

働く女性の「女性らしさ」に関する一考察

—芸能人の結婚会見を分析対象として—

登丸 あすか*

本論文は、ジェンダーの視点からメディアにおける働く女性像を分析したものである。2000年代以降女性の社会進出がさらに進み、それに伴ってセクシャル・ハラスメントやマタニティ・ハラスメント、待機児童の問題や男性の育児休業取得率の低さなど、女性を取り巻く労働環境の問題や子育て支援の状況などが注目を浴びている。これらは結婚や出産、育児など女性のライフイベントによって生じることが多く、結婚や出産を経て働き続ける女性の増加による社会変化の結果として捉えられる。育児休業法の改正などで働く女性の労働環境は整備されつつあるが、働く女性の支援は依然として十分とは言い難い。では、働く女性に対する価値観はどう変わったのか。本稿ではメディアが提示する働く女性像、とりわけ結婚のようなライフイベントとの関連を検証するために、著名人の結婚を報じるニュースがジェンダーの視点で分析されている。その結果から、働く女性が結婚する際には従来の伝統的なジェンダー役割が強調されており、そうすることで結婚が肯定的のものとして提示されていることを確認している。

Key words : ジェンダー, 働く女性像, 結婚, メディア

1 働く女性と労働環境の変化

1-1 働く女性をめぐる状況

近年働く女性の増加に伴い、セクシャル・ハラスメントやマタニティ・ハラスメント、待機児童の問題や男性の育児休業取得率の低さなど、女性を取り巻く労働環境の問題や子育て支援の状況などが注目を浴びている。内閣府によると、2018年の就業者数は女性2,946万人、男性3,717万人である。生産年齢人口（15-64歳）の就業率は近年男女とも上昇しているが、男性は2001年に80.5%から2018年に83.9%と微増であるのに対し、女性は2001年に57.0%から2018年に69.4%と大幅に上昇しており（内閣府, 2019）、2000年代以降急激に働く女性が増えたと言える。

そして従来から指摘されてきた日本の女性の

働き方の特徴であるM字型曲線にも変化が認められる。かつてのM字型曲線は周知のとおり、結婚や出産、子育て期とされる20代後半から30代前半にかけて女性の労働力率が下がり、その後、子育てが一段落した40代頃から再び上昇に向かうというものである。M字の底となる年齢階級は年々上昇しており、1978年には25-29歳（46.6%）がM字の底となっていたが、この年齢層の労働力率は次第に上がり、2018年では83.9%と年齢階級別で最も高く、同年には35-39歳（74.8%）がM字の底となっている（内閣府, 2019）。

1-2 女性の結婚と出産

これには女性の結婚、出産をめぐる状況の変化も関係していると言えるだろう。女性の平均初婚

*人間学部コミュニケーション社会学科

年齢は1975年には24.7歳であったものが上昇を続け、2018年には29.4歳となっている。同時に男性の平均初婚年齢も上がり続けており、1975年に27.0歳であったものが2018年には31.1歳となっている。これに伴い、女性の出産年齢も上昇している。第1子出生時の母の平均年齢は1975年25.7歳から2016年に30.7歳、第2子出生時の母の平均年齢は1975年28.0歳から2016年に32.6歳と大幅に上昇している。

したがって、働く女性の増加とともに結婚、出産についても晩婚化、出産時年齢の高齢化といった変化が確認できる。近年、少子高齢化が進む中で、労働力の確保といった側面から女性の活躍が期待され、2015年には「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」（女性活躍推進法）が施行された。その一方で、女性の労働環境は未整備な点も多く、セクシャル・ハラスメントやマタニティ・ハラスメントなどが深刻な社会問題となっている。

1-3 共働き世帯の増加と育児の問題

さらに共働き世帯も増加しており、内閣府によると1980年には男性雇用者と無業の妻から成る世帯、つまり専業主婦世帯は1,114万世帯に対して共働き世帯が614万世帯とあり、共働き世帯が圧倒的に少なかったものの、1997年に前者が921万世帯、後者が949万世帯と逆転した。その後、共働き世帯は増加の一途をたどり2018年には1,219万世帯に達し、専業主婦世帯の606万世帯を大きく上回っている。

共働き世帯が増える中、家事・育児を担う女性の負担の大きさが問題となっている。6歳未満の子どもをもつ夫婦の家事・育児関連時間は、妻が1日当たり7時間34分、夫が1時間23分、そのうち育児に占める時間が妻は3時間45分、夫が49分と大きな隔りがある。また、民間企業における男性の育児休業取得率は2007年に1.56%であったものが2017年には5.14%と上昇傾向にあるものの、全体の1割にも満たない（内閣府、2019）。厚生労働省によれば、2018年の育児休業取得率に関して女性82.2%、男性6.16%と男女間で著しい差があり、家事・育児の負担が女性のみ

に偏っていることが示されている（厚生労働省、2019a）。

以上から、働く女性の問題は労働の分野だけではなく、育児など家庭の問題にも発展している。また、少子化が進む日本社会においては出生率を上げることが期待されており、育児支援制度の不備は大きな社会問題となっている。

よく知られている通り働く女性は増加しているものの、子どもの預け先である保育所は不足しており、保育所の入所を待つ待機児童の多さが近年問題となっている。具体的にみると、希望しつつも保育所に入所できない待機児童の数は、2017年26,081人、2018年19,895人となっている。こうした状況に対して、各自治体が保育所の整備を進め、2002年には保育所の定員が196万人であったが、2018年には280万人と大幅に増加している。しかし需要には追いついておらず、2018年においても約2万人の待機児童数となっている。ただし、希望の保育所に入所できない場合には申請を取り下げられる場合もあり、その際には待機児童数に含まれないため、実際にはより多くの待機児童がいるだろうと推察されている。また、放課後児童クラブ、いわゆる学童も不足しており、2018年には17,279人が希望しながらも利用できない状態にある（内閣府、2019）。前述のとおり、育児の負担の多くが女性に偏っている現状において、子育て支援の不足は女性の労働環境を悪化させる主因の一つである。しかも、保育所入所の際には、両親の勤務状況や雇用形態などが審査の対象となる。審査の方法は自治体によって異なるものの、一般的には自営業者やパート契約の労働者よりも、正社員が有利とされている。したがって、雇用形態、勤務状況が保育所の入所の可否を左右しており、入所できない場合は高額な認可外保育所に預けるか、あるいは失職することなどもあり得る。

したがって、現実的には保育所入所をめぐる働く女性同士で争わなければならない状況にある。保育所に入所するためにはそれぞれの自治体があつ審査基準に照らしてより高い点数を獲得しなければならず、場合によっては少しでも入所できる可能性が高い地域に引っ越し家族もいる。保

育所入所を希望する親は、自身で居住地の保育所について調べ、役所に通ったり、保育所見学に行ったりするなど懸命な努力をするため、「保活」という言葉が生まれた。さらに、保育所入所の審査に落選した親がブログに投稿した「保育園落ちた日本死ね」という言葉が、2016年の流行語大賞¹⁾のトップ10に選ばれている。

また、育児休業に関してもあらゆる女性労働者が取得できるわけではない。原則としては1歳未満の子どもをもつ男女が取得できるが、契約社員はその契約内容によって取得できないこともある。その一方で、育児休業を取得できる労働者には育児休業期間中に育児手当が支給される。また、保育所に入所できない場合には、子が2歳に達するまで育児休業の期間を延長することが認められるようになった(2017年10月の法改正により)。育児休業の取得者への支援が一定程度手厚く整備されている一方で、その雇用形態によっては取得できない労働者もあり格差の原因となっている。

つまり、働く女性にとっては保育所に入所できるか否か、育児休業を取得できるかどうかなどが出産後の労働を継続する大きな課題となっている。保育所を整備し待機児童問題を解決することは各自治体や政府の責務であるものの、保活という言葉に表されるように保育所に入所できるか否かは親の努力次第といった印象も与えかねない。

育児休業を取得できない立場の労働者がいるからこそ、育児休業を取得した後に子どもを保育所に預けて復職するような正社員の女性は「恵まれた」存在として見られる傾向にある。そうした「恵まれた」女性労働者にとっても実際には育児休業取得の際に周囲の理解が得られず苦労したり、ハラスメントの被害に遭ったりするなどさまざまな問題を抱えている。また、復職したとしても夫の協力が得られず、妻が1人で家事・育児のほとんどを担う「ワンオペ育児」の問題が指摘されている(中野, 2014; 藤田, 2017)。

加えて、これらの社会的変化に伴い性別役割分業に対する見方も変化してきたと言えるだろう。内閣府によれば、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という固定的な性別役割分業について、1979年には「賛成」および「どち

らかといえば賛成」の割合は女性70.1%、男性75.6%であったものが、2016年には女性37.0%、男性44.7%と大幅に減少している。また、「反対」および「どちらかといえば反対」についても1979年には女性22.8%から2016年58.5%、男性17.4%から49.4%と大きく上昇している(内閣府, 2019)。こうした固定的な考え方については1980年代以降、劇的に変化したと言えるだろう。

こうした状況を振り返ると、人手不足や「女性活躍推進法」の成立などによって女性の就労が期待されているものの、女性が働き続けるための社会的支援は不十分であり、働く女性にとっては依然として結婚、出産といったライフイベントが就業の継続に大きく影響していると言える。固定的な男女の性別役割分業に対する考え方は変化しているにも関わらず、なぜ社会的な支援は十分に進まないのか。こうした働く女性に対する価値観にはメディアが一定の影響を与えていると考えられる。本稿では働く女性に対する価値観について、メディアが提示する働く女性像を分析対象に考えていきたい。

2 結婚、出産に関する女性像

2-1 メディアが構成する女性像

「ジェンダーとメディア」の研究領域において、メディア内容に関する研究の蓄積は豊富であり、1970年代からメディアが提示する伝統的なジェンダーの価値観が批判の対象とされてきた(鈴木, 2005)。初期の研究において井上は、マスコミの描く女性像は職業と関連して取り上げられるよりも、恋人や妻、母、主婦として提示されることが多いと指摘する(井上, 1980:113-114)。また1990年代に入ると、多様な家族の在り方を提示する傾向があるとしながらも、性別役割分業が依然として根強いとの指摘もなされており(ヒラリー, 1998)。そうしたメディア内容は、オーディエンス、生産するマスメディアとのせめぎあいの中で構築されてきた(国広, 2002)。

2-2 働く女性としての女性タレント、芸能人の結婚、出産、子育て

では、働く女性の増加、性別役割分業に対する意識の変化などを踏まえて、メディアが提示する働く女性像はどう変化してきただろうか。ここでは具体的な事例を検討しながら近年の傾向を把握したい。

アイドルやタレントなどの芸能人が結婚、出産、一定の育児期間を経たのち、母親であることをアピールしながらテレビや雑誌などで活躍する、いわゆる「ママタレ」と呼ばれる人たちがいる。彼女たちはブログやインスタグラムで日々の出来事を投稿したり、雑誌やテレビ番組に登場したり、ファッションブランドを展開するなど幅広く活動している。ただし、母親になれば誰でもママタレとして活躍しているわけではなく、芸能活動を控える人もいれば、自身の子どもの預け先である保育園の申請が却下され困惑する状況をブログで語る人、子どもを中心とするプライベートな情報をネット上で晒したために批判されたり、裕福な生活を掲載することによって批判を受け、炎上したりすることもある。

2-3 著名人の結婚、出産、育児

数多くいるママタレの中でも小倉優子は人気が高い²⁾とされている。かつては、バラエティ番組などで活躍するアイドルであったが、2011年に結婚して2児の母親となり、2017年に離婚すると同時にタレント活動を再開した。離婚については、彼女の第2子妊娠期における夫の不倫が理由とされており、シングルマザーとして育児に奮闘する姿をブログなどで公開している³⁾。タレントとして活動しながら、つまり働きながら育児に奮闘する姿は一定の評価を得て、ママタレとしての人気を博す結果となっている。

一方で、裕福な生活をSNS上で公開したり、子どもの情報を過度に晒したりするなどした場合にはママタレや女性芸能人・著名人は批判の対象となりやすい。例えば、元NHKアナウンサーで4児の母親でもある青山裕子は産休と育休を繰り返し取得したことを理由に批判された。彼女は2011年に結婚し、2012年1月の番組出演後に産

前休暇に入り、同年3月に長男、2013年6月に長女、2015年7月に次男、2017年2月に次女を出産し、約7年間産前産後休暇及び育児休暇を繰り返し取得して、復帰することなく2019年3月にNHKを退職した。この間に、親交のある女性タレント、神田うのが自身のインスタグラムに主催したパーティーへ青山裕子が参加した様子を投稿した。この投稿が契機となり、7年間に産休育休を繰り返し取得したことなどが批判された。産休および育休の取得は権利であり問題ないものの、7年間という長期にわたって取得できること自体が「恵まれている」とされたのである。これに対して、当然の権利であるとして擁護する意見も出されて物議をかもした⁴⁾。こうした「恵まれた」環境に対する批判は一般の社会で産休・育休を取得することの難しさを露呈するものであるが、裕福な生活や、育休・産休を複数回取得できるといった「恵まれた」環境は批判の対象となり、ブログやインスタグラムなどが炎上する一因となる。

さらに、結婚と同時に妊娠を発表することも批判の対象となり得る。女優の武井咲（当時23歳）とダンス・ヴォーカルグループEXILEのメンバーであるTAKAHIRO（当時32歳）は結婚と同時に武井の妊娠を発表した（2017年9月）。この2人は結婚会見などを実施せず、メディア向けにファックスおよび公式サイトで結婚報告を行った。この結婚のニュースに対してネット上では「（結婚と同時に妊娠したことに対して）順番が違う」「突然の発表ではスポンサーやドラマの関係者に迷惑をかけることになる。武井は仕事に対する責任感がないのではないか」「結婚するには年齢が若すぎる。結婚を無理やり押し通すために『できちゃった婚』をしたのではないか」といった否定的な意見が目立った。武井の年齢が23歳とまだ若かったこと、人気の高い女優と歌手同士の結婚であり、いわゆる「できちゃった婚」に対する抵抗などがこうした意見の背景にあるのではないかと推察できる。

このように結婚や妊娠、出産、子育てについては発表のタイミングやその内容、当事者の年齢などさまざまな要素が批判の対象となる。一方で、

非常に好意的に受け止められる結婚発表もある。その一例として俳優の蒼井優（33歳）とお笑い芸人の山里亮太（当時42歳）の結婚発表を取り上げたい。2人は2019年6月5日に入籍を発表した。このニュースは非常に大きく取り上げられた。会見は中継され、その発言の全文がネット上に掲載され、ネットでも、テレビのニュース番組でも大々的に報じられたのである。このニュースはなぜそれほど注目されたのだろうか。

蒼井は数々の映画やドラマに出演し、多くの賞を受賞している。また、山里は吉本興業に所属するお笑い芸人で、「南海キャンディーズ」という名前でも山崎静代とともにコンビを組んでいる。ナレーションや司会業、バラエティ番組に出演するなど幅広く活躍している。山里は、女性からあまり人気がない、好かれなことを公言し、女性から人気がある人に対する妬みや嫉妬をテーマに漫才やトークをしてきた。そうした経緯から、容姿端麗で人気ある俳優の蒼井と結婚したことは予想外のニュースとして報じられた。

蒼井と山里は2019年6月5日に東京都内のホテルで結婚会見を行った。その内容は中継され、お笑い芸人と俳優という意外なカップルとして大々的に報じられるとともに、その会見の内容が非常に好意的なものとして受け止められたのである。本稿ではこの会見を分析対象として次節で取り上げるため、その内容については後述する。

いずれにしても、働く女性にとって結婚、出産、育児といったライフイベントは仕事を続ける上で大きな影響を与えており、7年間の産休育休を取得した元アナウンサーが批判の対象となったように、女性の就労を支援する制度も、場合によっては働く女性に向けての批判の理由となりえる。2000年代に入って、育児休業制度の改正や保育所の整備など社会の課題に応じてさまざまな支援が検討され実行されているが、働く女性にとっては依然として十分とは言えない。

こうした制度を利用できるか否かを左右する雇用形態や、居住地域の子育て支援の状況が働く女性の連帯を妨げ分断化しているようにも見える。なぜなら、子どもを保育所に入所させることができた親は保育の質の向上を求めるが、入所させら

れなかった親は保育所の増加を要求する。育児休暇を取得できる人もいればできない人もおり、そうした立場の違いが育休産休を長期間取得した元アナウンサーへの批判にも表れているのではないだろうか。

このような批判が起こる背景として、そもそもメディアがどのように著名人の結婚や出産を発表しているかを検討する必要があると考えられる。例えば、芸能人の結婚を報じるニュースでは、結婚の事実と同時に女性が妊娠しているか否かを記載している。妊娠もまたお祝い事ではあるが、結婚と同時に妊娠を発表すれば、前述の例からも明らかのように「順番が違う」「働く女性として責任感がない」といった理由で批判される。妊娠した女性が批判を受ける一方で、そのパートナーである男性に対しては批判的なコメントはほとんど見られない。これは、働く女性として妊娠の時期をコントロールすることが要求されているかのような報じられ方である。こうした報道の在り方はオーディエンスのニュースの読み方に一定の影響を与えており、オーディエンスもSNSやネットニュースのコメント欄で気軽に発信できる現代においてはその反応を左右する重要な要素と言える。

そこで本稿では、芸能人やタレントなどの著名人が結婚というライフイベントを発表する際の報道を分析対象とする。その結果から、働く女性にとっての結婚がどう提示されているかを明らかにしたい。

3 分析方法

分析対象は2019年6月8日にTBSで放送された『新・情報7days ニュースキャスター』（22:00~23:24）のうち、山里亮太と蒼井優の結婚会見を報じた「山里亮太（42）蒼井優（33）電撃婚！笑顔の報告会見」（10分5秒）のニュースである。山里と蒼井は6月3日に入籍し、その2日後に結婚会見を東京都内のホテルで午後7時から行った。結婚会見の直後から多くのニュース番組、情報番組、ネットニュースなどで報じられたが、本稿では週末の6月8日（土）夜の時間帯に放送されている『新・情報7days ニュースキャスター』

を取り上げる。その理由として、平日のニュースや情報番組では複数日にわたって会見の一部をさまざまな角度から報じているが、週末の情報番組では1週間の動きをまとめた形で放送しているため、全体の特徴を把握する上で分析対象として適当であると考えられる。

分析の手順としては、まず番組全体の構成をワークシートに書き出し、山里と蒼井の結婚会見を報じるニュース項目を抽出し、その構成をさらに細かく書きだした⁵⁾。なお、分析対象のニュース項目は結婚会見を編集しているが、分析の際には実際の結婚会見全体を参考にした。

4 分析結果

4-1 ニュース全体の構成

表1は、分析対象のニュース項目、「山里亮太(42) 蒼井優(33) 電撃婚! 笑顔の報告会見」(10分5秒)の構成を場面ごとに書き出したものである。スタジオ(No.1)でキャスターがニュースを紹介する場面から始まり、「ニュースの導入部」(No.2)では街頭インタビューで驚く一般の人の声を紹介している。この場面では結婚会見の映像の一部が用いられており、お互いを何と呼びあっているかという記者の質問に答える形で、お互いを「優」「亮太」と名前呼び合っていると回答している。

「結婚の決め手」(No.3)では、記者から「結婚を決めた最大の理由は」と問われ、蒼井が答える場面が用いられている。お笑い芸人である山里は、その蒼井の回答にコメントする形で会場の笑いを誘っている。しかし、山里が結婚の理由について答える場面はない。つまり、容姿端麗な蒼井がなぜ結婚相手としてお笑い芸人である山里を選んだのかという疑問が強調される構成となっている。

さらに、「キュービッド役」(No.4)では2人の仲介役となった、山崎静代が登場し、交際に至った経緯が説明される。「交際後の様子」(No.5)では、交際を開始してからの様子が紹介され、「親への挨拶」(No.6)では蒼井の実家へ挨拶に行った様子が報告される。蒼井の父親がユーモラスに対応したこともあり、全体的には会場からの笑い

が絶えない様子で会見が続いているかのように構成されている。

雰囲気が一変した質問があったとして始まったのが「魔性の女」(No.7)の場面である。「恋多き女性と言われている蒼井さんに浮気される心配はないか」という記者からの質問に対して山里が「魔性の女」という単語も使われているがそうではない」と否定し、蒼井の人柄の良さを主張して彼女を庇う場面である。

そして、これを受ける形で「結婚の決め手」(No.9)で再び蒼井が自ら言い残したことがあるとして「山里の仕事に対する姿勢を尊敬しており、支えたい」と述べる。次に「ラジオ番組」(No.9)では、会見当日の夜に生放送されたラジオ番組の一部が紹介され、山里が結婚に対する考えを吐露する。最後に「スタジオ」(No.10)に戻り、それぞれのコメンテーター、キャスターが結婚に対する感想などを述べ、コメンテーターの1人が「久々にいい結婚」と高く評価する。

以上から全体を通してみると、冒頭では驚きのニュースとして紹介され、結婚会見はユーモラスな形で紹介されるものの、後半では「魔性の女」として揶揄されてきた蒼井を山里が庇い、それを受ける形で「山里を支えたい」と蒼井が答え、「いい結婚だ」と高評価でまとめるという構成になっている。

4-2 結婚会見にみる男性役割

分析の際には、表1にある構成に沿う形で、登場人物の発言内容を全て書き出している。その発言の詳細を見ると、全体として山里の発言量の方が多く、全体をリードする形で進めていることがわかる。例えば、「結婚の決め手」では具体的に以下のようなやり取りがある。

記者：結婚した最大の理由は？

蒼井：しんどい位笑わせてくれたり、感動することと許せないことのラインが一緒だったり……冷蔵庫をすぐ閉める。

山里：蒼井さん、蒼井さん、今の出し方で「冷蔵庫」きたらもう出きった感スゴいのよ。「冷蔵庫ちゃんと閉める」で好きになっ

表1 山里亮太と蒼井優の結婚会見のニュース構成
(10分5秒, TBS『新・情報7days ニュースキャスター』2019年8月6日)

No.	場面	内容	主な発言内容	時間量
1	スタジオ	キャスターが結婚会見があった旨を報告	驚きのニュースがあったと報告	0:00:12
2	ニュースの導入部	結婚会見の映像		0:00:59
		街頭インタビュー	女性2人組, 男女カップル, 2人を知る男性俳優: 驚いたと回答	
		結婚会見の場面	普段のお互いの呼び方を答える: 「優」「亮太」	
		会見当日の山里のラジオ番組	山里: 結婚に対する考えについて	
3	結婚の決め手	会見場に2人で登場	山里: 6月3日に結婚したと報告	0:01:17
		結婚の決め手についての回答	記者から「結婚した最大の理由は?」との質問/蒼井: 山里がユーモラスである点/価値観の一致/冷蔵庫の閉め方	
			山里: 蒼井の発言に対してコメント→会場の笑い	
			蒼井: 優しいところと追加で回答/山里がその内容に対してコメント→会場の笑い	
4	ピット役	南海キャンディーズ: 山崎静代が登場/山崎と蒼井が共演した映画の紹介(映画の映像) 山崎が記者の質問に回答	山崎が蒼井に紹介し, 交際に至った経緯を説明	0:00:39
5	交際の後の様子	約2か月前の山里の出版記念会見 VTR	山里: 恋愛に関する噂がないことを記者に確認	0:00:39
		デートに関する質問に答える蒼井と山里: 山里は蒼井の方を振り返って返答を確認	山里と蒼井: 2人とも緊張して土手を歩いていた初デートを報告	
6	親への挨拶	蒼井の両親へ挨拶に行った様子	山里と蒼井: 蒼井の父親の様子をユーモラスに語る→会場の笑い	0:02:06
			蒼井: 一人娘のため父親は思い入れがあったと答える.	
7	魔性の女	記者から魔性の女との評判について問われる	記者からの質問: 「恋多き女優」とされている点について質問 山里: 魔性の女と言われるような性格ではないと否定→蒼井が涙ぐむ	0:00:43
8	結婚の決め手	蒼井が自ら「結婚の決め手」に関する質問に再度答える	蒼井: 山里の仕事の姿勢を尊敬している点, 今後, 夫を支えていくつもりと回答	0:00:37
9	ラジオ番組	会見後のラジオ番組の収録の様子で結婚に対する考えを伝える	山里: 不幸せなキャラクター設定と矛盾する行為として結婚に躊躇していたことを報告	0:01:08
10	スタジオ	安住アナウンサー: 番組のゲスト紹介/ゲストによる結婚へのコメント	湯山: 久々にいい結婚と評価. 池谷: 結婚によって株が上がったと評価.	0:02:24
		北野武のコメント	北野: 芸人として結婚後もキャラクター設定を貫く重要性を強調	

てもらったら……

蒼井：あっ！

山里：思い出してくれました。

蒼井：やさしい。

山里：ざっくりです。

このように主として蒼井が回答する場面であっても、山里が進行し、笑いを誘うような形でコメントするなど主導している。彼の仕事は番組の司会として進行することや、笑いを取ることであるため、会見を主導することは当然のことのようにも思える。俳優である蒼井は明らかに記者会見で自由に話すことに慣れておらず、山里に促されたり、あるいは互いに確認したりしながら慎重に回答している様子が確認できる。

そして前節でも述べたが、前半のユーモラスな雰囲気とは異なり、「魔性の女」(No.7)は緊張の場面となる。このニュースでは取り上げられていないが、実際の会見の場面では何度か「魔性の女」という単語が使われており、そのことを山里が指摘する以下のようなやり取りがある。

記者：“恋多き女優”という風に私たちは思っ
て取材をさせていただきましたが……

山里：よく心配されますよね。皆さんからさっ
きから出ている“単語”もあるじゃない
ですか。そういうのでみんな心配するん
ですけど一切心配していません。それは
たぶん皆さんの目の前にいる蒼井さん
と違う蒼井さんを僕は見せていただい
ている。“魔性”って単語も使っているけ
ど僕はそんな人間じゃないというのを一
緒にいてずっと見ていたんで、皆さんが
思う“魔性”から発生する心配というの
は一切ございません。

このニュースでは省略されているが、実際の会見では蒼井の性格の良さや素直なところを具体的に述べたうえで、「魔性の女」であるという記者の主張を強く否定している。これを隣で聞いていた蒼井は涙ぐむ。山里が蒼井を擁護する場面であり、男性が女性を助けるという男性役割が明示さ

れたと言える。

4-3 結婚会見にみる女性役割

蒼井を庇う山里の強さが示された後、「結婚の決め手」(No.8)では以下のように蒼井が答えている。

蒼井：あの先ほど、山里さんのどこが結婚の決め手になったかと言われた時に一番大事なことを言うのを忘れてしまして。私は山里さんの仕事に対する姿勢を本当に尊敬しています。できる限り亮太さんを支えたいと思います。

蒼井はここで、自ら「言い残したことがある」と質問を遡り、「妻として夫を支える」という趣旨のことを述べ、女性役割を引き受けると主張する。こうした男性役割と女性役割が強調された形で会見がまとめられ、最後の場面でコメンテーターが「いい結婚だ」と高評価を与えるのである。

5 結論

全体を通してみると、冒頭では驚きのニュースとして紹介され、結婚会見はユーモラスな形で紹介されるものの、後半では「魔性の女」として揶揄されてきた蒼井を庇う山里の男らしさが強調される。さらにそれを受けて、「山里を支えたい」という蒼井の女らしさが提示された。したがって、本分析の結果からそれぞれが男性役割、女性役割を明確に引き受け、男性らしさ、女性らしさが強調される構成によって「いい結婚」として肯定的に捉えられていると確認できた。

しかし、「結婚の決め手」(No.8)で蒼井が山里を支えると述べる際に、実際の会見では自分の仕事に対する姿勢についても触れている。具体的には、蒼井は自身が仕事に没頭してしまうタイプであると述べ、これは山里との共通点であると指摘する。そして、「自分が与えられた仕事は精一杯やっけていき、できる限り山里さんを支えたい」と述べる。分析対象のニュースでは、女性が「支えたい」と述べている点が強調されているが、実際

には「自分の仕事も精一杯やりたい」とも答えているのである。

一方で、前節で述べたとおり「魔性の女」(No.7)の場面では、記者から蒼井の浮気を心配するかという記者からの質問を受けて山里がそれを強く否定する。しかし、「山里が浮気をするのではないか」という質問はここでは取り上げられない⁶⁾。会見の場面では美しい女性と結婚する山里へお祝いの言葉が述べられるものの、そうした美しい女性には「魔性の女」という二面性があるのではないかという疑念も提示されているのである。このように振り返ると、この結婚会見では女性の仕事に対する姿勢や「魔性の女」のような女性の二面性など女らしさに関する複雑な要素が提示されているが、分析対象のニュースでは「女性役割」「男性役割」というステレオタイプに収められてしまっていると言えるだろう。

こうしたジェンダーの伝統的な価値観が明示的に示されるメディアの報道を受けて、近年ではオーディエンス側がネット上でさまざまに反応し、炎上することもある。今では、テレビのニュース報道、ネット上のニュース映像、新聞を含めた様々な媒体の記事、個人のブログやSNS上の反応など、ニュースが非常に多様な形態で発信され、解釈されている。本稿ではテレビのニュース映像の分析を中心にしているが、多くのメディアで複雑に構成されるニュースを多角的に読み解いていくことが今後の課題と言える。

注

- 1) 『『現代用語の基礎知識』選・2016 ユーキャン新語・流行語大賞』のトップ10に「保育園落ちた日本死ね」が選ばれ、受賞者として山尾志桜里衆院議員が発表・表彰式に出席。
- 2) ORICON NEWS「好きなママタレランキング」で2017年、2018年に1位とされている。
- 3) ただし2018年12月に再婚している。
- 4) この事例についても詳細な検討が必要ではあるが、紙幅の関係からここでは省略する。
- 5) ニュースの分析方法においては鈴木みどり(2003)のワークシートを用いた。
- 6) 実際の結婚会見では両者に浮気の心配があるか

を聞いている。

引用文献

- excite ニュース. 神田うの, 元NHKアナ青山祐子さん産休批判に「批判する社会がおかしい」.
https://www.excite.co.jp/news/article/Techinsight_20190716_621966/
 (2019年9月20日閲覧)
- excite ニュース. 武井咲, 批判を浴びた“電撃デキ婚”から人気回復したワケ 結婚2周年に祝福の声殺到.
https://www.excite.co.jp/news/article/Real_Live_48462/
 (2019年9月20日閲覧)
- 藤田結子(2017). ワンオペ育児——わかってほしい休めない日常, 東京: 毎日新聞出版.
- 井上輝子(1980). 女性学とその周辺, 東京: 勁草書房.
- 厚生労働省(2019a). 平成30年度雇用均等基本調査(速報版).
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_05049.html
 (2019.9.23 閲覧).
- 厚生労働省(2019b). 平成30年版働く女性の実情.
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/18.html>
 (2019.9.20 閲覧)
- 内閣府(2018). 平成30年版男女共同参画白書.
- 中野円佳(2014). 「育休世代」のジレンマ——女性活用はなぜ失敗するのか?, 東京: 光文社.
- ORICON NEWS. 第3回「好きなママタレント」ランキング.
<https://www.oricon.co.jp/special/52062/>
 (2019年9月20日閲覧)
- スポーツ報知. 神田うの, 元NHKアナ青山祐子さんの近影を公開…「産休取り続ける」批判の声に反論.
<https://hochi.news/articles/20190716-OHT1T50093.html>
 (2019年9月20日閲覧)
- 鈴木みどり(2005). ジェンダーとメディア, 竹内郁郎・児島和人・橋本良明編, メディア・コミュニケーション論, 東京: 北樹出版.

働く女性の「女性らしさ」に関する一考察（登丸あすか）

鈴木みどり（2003）. Study Guide メディア・リテラシー——ジェンダー編，東京：リベルタ出版.

（2019.9.25 受稿，2019.10.2 受理）